

<「知るっば!久留米」 令和2年9月17日(木) 12:30~放送分>

久留米の救急救命 ～第3回～ 救急車

<ゲスト：久留米広域消防本部 救急防災課 課長補佐 中村慎一さん>

坂本 MC (以下「坂本」)

「知るっば!久留米」ナビゲーターの坂本豊信です。

9月は、『久留米の救急救命』をテーマに医療や救急救命にまつわるお話をお送りしています。

今回のゲストは、この方です。

ゲスト:中村慎一さん (以下「中村」)

久留米広域消防本部、救急防災課の中村です。

よろしくお願いします。

坂本 よろしく申し上げます。

今日は、『久留米の救急救命』の第3回ということで、みなさんご存じの『救急車』をテーマにお話をうかがいます。

子どもさんたちも大好きな働くクルマの救急車ですが、市民のみなさんの命を救うために、日夜、現場に急行しています。

久留米広域消防本部には、何台ぐらい救急車があるのでしょうか？

山下 私たち久留米広域消防本部は、久留米市、大川市、小郡市、うきは市、大刀洗町、大木町の4市2町を管轄しており、現在17台の救急車で救急要請に対応しています。

坂本 なるほど、たくさんの町や市と一緒に救急車を運行されているということですが、1日にどれぐらい救急出動されるのですか？

山下 昨年は、1日平均58件の出動、24.7分に1件の割合で救急車が出動したことになります。

事故種別では、急病が63%、次いで怪我などの一般負傷が16%、病院間を搬送する転院搬送が9%、事故が7%となっています。

坂本 やっぱり急病など病気の方が、半数以上ということですね。

実は私の母が自宅で倒れたことがあって、その時に救急車で病院まで搬送してもらいました。

その時は、よくテレビドラマとかで見るように家族の方も乗って下さいと言われて、付き添って私も救急車に乗ったんですけど、気が動転していたのかよく覚えてないんですよ。

ただ、車内には機械とか道具がたくさんあったぐらいしか覚えてないです。

救急車に乗った経験のある人は少ないと思うのですが、車内にはどんな装備が積んでありますか？

山下 救急車の中には、様々な機器があります。
傷病者の心臓の動きを観察する心電図や、心肺停止の方に使用する AED という電気ショックを与える機械などです。
その心電図の記録や救急車内の傷病者の状態を動画で医療機関の医師に伝えるための伝送装置などもあります。
搬送中の傷病者を医療機関とリアルタイムに情報共有することで、救急車内での処置を迅速に行うことができますし、医療機関への到着後のドクター引き継ぎも確実にできます。

坂本 なるほど、私が乗った時はわからなかったのですが、随分と色々な機械があって、なんだかハイテクになっているのですね。
安心してお任せできますね。
あと、新聞でちょっと見たのですが、新型コロナウイルス感染の疑いのある方を搬送する時に使用する大型の保育器のような装備が導入されたと読みました。
これって、どのような装備ですか？

山下 実は先日、久留米市防災協会連合会から、新型コロナウイルス感染症の搬送時に使用するアイソレータという感染症患者搬送資機材を2機寄贈していただきました。

坂本 アイソレータという名前なんですね。

山下 アイソレータというのは、ビニール製のカプセルで傷病者を覆い、救急隊員を感染から防ぐ機材です。
カプセル内を減圧して、カプセルの外へのウイルス拡散を防いで、減圧除去装置のフィルターでウイルスを収集し、使用後に紫外線殺菌灯でウイルスなどを殺菌することができます。

坂本 なるほど、中の気圧を下げて、ウイルスが外に出ないようにするために、新型コロナウイルス感染の疑いがある方を保育器みたいな機材の中にすっぽり入れて、病院に運ぶんですね。
隊員のみなさんも危険と隣り合わせて活動をなさるわけだから、やはり大変ですよ。
市民のみなさんが急な事故や病気になった時に救急車の通報をするわけですが、ご家族とか近くにいる人が苦しめられていたりするので、ちょっと慌てることも多いと思うんですよね？
119番に通報する時の適切なやり方、アドバイスをぜひ聞かせてください。

山下 久留米広域消防本部では、救急車の適正利用を呼びかけています。
救急車を呼ぶことは、一生に一度あるかないかだと思うので、ためらいもあると思います。
もし、救急車を呼ぶかどうか悩む時は、24時間365日つながる電話番号#7119の救急医療電話相談センターに相談してみてください。

救急医療電話相談センターは、救急知識のある看護師が対応し、救急車を呼ぶべきか、病院を受診すべきかなどをアドバイスしてくれます。悩んだら、ぜひ活用してください。

#7119は、携帯電話からでもつながります。

坂本 なるほど、迷ったら相談をしていいですよということですね。

私たちが判断に困ることがあって、それほど重篤ではないかもしれないけれども、もしかしたら重篤かもしれない、どちらか判断できない。

また、本人は救急車を呼ばなくていいと言ってるけど、ちょっと気になるとかですね。

そんな色々な場面があると思うのですが、その時は#7119番にぜひお電話をしてみてください。

中村さん、今日はどうもありがとうございました。

次回は、『ドクターカー』をテーマにお届けいたします。

1週目にお越しいただきました山下さんが、再登場です。

来週もぜひお聞きください。